
とある魔術の固有結界

偽善者と書き道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の固有結界

【Nコード】

N0806R

【作者名】

偽善者と書き道化

【あらすじ】

かつて主人公だった青年は学園都市にて主人公と邂逅する。

正義の味方と主人公「ヒーロー」が邂逅するとき、物語が始まる！

ある物語の終演（前書き）

偽道です。

クロスオーバー物読んでてふと思いました。

大抵士郎がゼルレッチの爺さんか遠坂に平行世界にぶっ飛ばされるなあ」と。

いや、自分の書いた物より兆倍面白いけど…。

まあ、で、天の邪鬼な偽道は今度はエミヤになる過程の途中の士郎を書いて見ました。

クロス物でコレは無かったはず！！

と言う思いから。

今回は、f a t eの終演からです。

後書きは一部不快に感じる方もいると思うので、それでも良い方のみどうぞ。

後書きの苦情は受付ません。

ある物語の終演

ある少年と少女の戦いは終えた。

残る役目はただ一つ…。

穢れた聖杯の破壊。

黄金の剣を構える少女を赤毛の少年は見詰め続ける。

(俺は……セイバーが…好きだ)

目の前には穢れた聖杯があり、令呪は一画残っている。

今なら……セイバーに令呪で命じれば無理矢理にでも聖杯を浴びさせて現世に留めさせる事が出来る。

しかし…

(本当に……セイバーを愛しているならば…)

少年は決めていた覚悟を再び強める。

(彼女の誇りを汚してはならない!!…)

だから…

「セイバー、キミの役目を果たしてくれ!!…」

「約束された勝利の剣「エクスカリバー」!!」

一筋の光が闇を切り裂く。

これで……後戻りは出来ない。

いつの間にか、朝焼けが昇り初めている。

夜はもうすぐ明ける……。

「ああ、最後に言っておかないと……」

朝焼けに照らされて黄金色に輝く少女は少年に告白「別れ」を告げた。

「シロウ……貴方を愛している」

少女は少年の答えを待たずに消えていく。

ただ1つの形も残さずに……幻想的な光になって……。

「ああ、本当にお前らしい……」

少年はこの思いを……セイバーが好きだったと言う事を忘れぬと誓う。

黄金の風を……

その光景を、少し離れた所から見ている少女がいた。

「貴女は……そうやって、彼の心も連れて行くのですね……」

少女の名は神裂 火織。

必要悪の教会所属の魔術師で、サーヴァント程ではないが、強力な肉体を持つ聖人。

現在の見た目は高校生位に見えるが、れっきとした13歳である。

神裂は教会の命で聖杯の回収任務に付いたものの、ランサーに敗北。

そこに、偶然遭遇した赤毛の少年…… 士郎に助けられた。
とまあ、その辺はまた別のきかいに話そう。

なんだかんだで神裂は士郎と言う少年に好意を抱いていた。
同時に、士郎の気持ちが見えがセイバーに向いていた事も……。

「貴女が彼にそんな事を告げれば……私に勝ち目などないではないですか……」

回収したイリヤを抱きながら神裂はこの場に背を向けた。

卑怯だと思った。

自分の方が僅かであるが、先に出会ったのにと感じた。

「ただど……あの別れは何人たりとも邪魔をしてはならないと感じていた。」

神裂は、思いを振り払う様に衛宮邸に走った…。

3日後

神裂は1人荷物を纏めていた。

何時までもここに居る訳にはいかない為、帰り仕度しているのだ。荷物の整理が終える頃に扉をノックする音が響く。

「神裂、なにか手伝える事ないか？」

「いえ、帰りの仕度は終わりました」

「そっか」

士郎は扉を開け、部屋に入ると一番大きな荷物を持つ。

「玄関まで運べばいいか？」

「ええ、お願いします」

玄関まで荷物を運び終え、呼んだタクシーの到着を待つ。

イリヤと桜は神裂に遠慮してこの場にはいないため、今ここにいるのは神裂と士郎だけだ。

「士郎さん……聞きたい事があります」

「ん、俺が答えられる事なら話すよ」

神裂は士郎の瞳をジッと見据えながら聞いた。

「士郎さんは……これからも正義の味方を目指すのですか？」

神裂は不安だった。

アーチャーのサーヴァント……。

神裂には、何故か彼に士郎と同じ何かを感じた。

思い出すのはアインツベルンの城。

ただ、行けと告げていた紅い背中。

「ああ、俺は正義の味方を目指す。全てを救えるなんて思っていない。

だけど、せめて……手の届く範囲にいる人達に笑顔でいて欲しいから」

「そつ……ですか……」

士郎もあの紅い背中のように誰かを守って、勝手に消えて行くのではないかと言う不安が神裂を襲う。

「神裂、タクシーが来たみたいだぞ」

「はい……そうですね」

神裂と士郎はタクシーに荷物を詰め込んでいく。

荷物も詰め終わり、神裂はタクシーに乗り込もうとして、足を止めた。

「そうでした。最後に告げておきたい事があります」

自分はセイバーに勝てない事は神裂は理解していた。

士郎の1番はセイバーで、自分はその席に座れないだろう事は理解していた。

……それでも、告げないで終わるより、告げて終わりたい。

「士郎、貴方の事が好きでした」

神裂はそれだけ言うと、タクシーに乗り込み出す様に促す。

後に残ったのは士郎1人。

「本当に……似てるなと思ってたけど……ああ、確かに神裂らしい」

士郎は自分の部屋に足を向ける。

神裂の気持ちには応えられない。

衛宮 一郎の一番の席は未だセイバーのものなのだから。

士郎は部屋に入る。

殺風景な部屋にただ一つ、机の上にちよこんと置かれたライオンのぬいぐるみ。

セイバーが思い出以外で唯一残して行った物。

「見ていてくれ……セイバー。」

俺は……正義の味方になってみせるから！」

この物語はこれより六年後、未熟な少年より騎士へと成長した青年……元主人公と、未熟でありながら、かつての彼と似た思いを持つ主人公の邂逅により幕を開く。

ある物語の終演（後書き）

当麻「なあ、この小説……て俺が主人公なんだよな？」

偽道「そうですね」

当麻「まるで、アイツが主人公で神裂がヒロインみたいにみえるの
ですが？」

偽道「安心しろ当麻君。

キミは主人公だ！

そう言えば、PSPのゲーム買ったよ！

……最終章が糞だったなあ」

レッド「糞とはなんだ！

我らの何処が糞だ！！」

偽道「勝手に人を玩具にしてる所とか？

いや、つーかあの超設定には多くのプレイヤーが思っただろう…。

期待して損した…と」

当麻「あのよう……偽道。

ここはそんな話をする場所じゃないぜ」

偽道「麦野怖え〜よ！

つーか、主人公「ヒーロー」が初っぱなで死んでどうすんの…！

つーか、麦野どうやって神裂とアックアに勝ったの!？」

当麻「その手の突っ込みはしたらキリ無いぞ……格ゲーだし」

偽道「ふう、やっぱ戦ヴァル3やろ。

とある は売る」

当麻「逃げるなよ！プレイする事から逃げるなよ！

プレイする方が……戦いだ！！」

偽道「という事では次回！」

新たな物語のプロローグ（前書き）

偽道です。

戦闘描写が難しいです。

神裂が少し弱くなってる気がする…。

ついでに、神裂は衛宮 士郎とアーチャーが同一人物とは知りませ
ん。

新たな物語のプロローグ

炎に包まれた街。

助けを求める声も今は無く、ただ、ただ黒焦げになった人間だった物が転がっていた。

「桜……」

青年は後悔する。

全てを救おうとした己の愚かさを。

青年は覚悟を決める。

大切な1を切り捨てる覚悟を……。

「我が死後を預ける……」

青年を中心に大きな魔力が流れ始める。

「その報酬を……ここに受け取りたい」

魔力は青年に流れ込んだ。

この事件をその後すぐに終息した。

解決者はアーチャーと名乗る青年。

滅びた街の名は 冬木。

街の住民はセカンドオーナーの遠坂を初め一般人まで生存者は無し。

この悲劇の元凶となった女性……間桐 桜は死体として発見された。

今より、3年前の話である……。

学園都市

超能力者を開発しているこの都市で、1人の黒髪ツンツン頭の少年が逃げる様に走っていた。

……いや、彼は実際に逃げている。

彼の名は上条 当麻。

少々情けない登場だが、正真正銘この物語の主人公「ヒーロー」である。

「ええい！ くそっ！ くそっ！

あーもうちくしょー不幸すぎますーっ！！」

その逃げ足は正に俊足！

それを追いかける追跡者が8人。

このペースのスピードで2キロ追い駆けっこする9人の学生達。

その情熱をスポーツ面に役立てればかなりいい線までいくだろうに。

まあ、我らが主人公が何故追いかけてられているかと言えば……。

回想開始

七月十九日

高校生達には浮かれるには充分な日だ。

何故なら、二十日からは夏休み。

海に行くもよし！

実家に帰省するもよし！

クーラーの効いた部屋でゴロゴロするもよし！

正に高校生活で最大のパラダイスが目の前に来ているのだ。

上条 当麻もまた、浮かれている学生の1人。

いつもの不幸にもめげぬハイな精神のまま、一丁豪華な無駄食いするかーっ！

とファミレスへ入り苦瓜とエスカルゴの地獄ラザニアを注文。

そして、視界に入ったのは明らかに酔っ払った不良。

そんな不良に絡まれる女子中学生。

助けってやっかなー、という常軌を逸した思考を働かせてしまったのだ。

回想終了

上条はただひたすら突っ走る。

チラリと視界に入るのは上条にとっての最大の武器である右手。

しかし、彼の右手はこんな状況下では意味を為さない。

「うっ、不幸だーっ！」

上条は走る。

8人の不良を“助ける”為に。

上条 当麻は“女の子を助けよう”など思っていない。

“不用意に彼女に近づいた少年達を助けよう”と思ったただけだ。

「まったく、何やってんのよアンタ。

不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

その声に上条の体は凍りつく。

灯りが少ない為に今まで気づかなかったが、上条が走ってきた方向に小柄な人影がある。

「……事はアレだろ？」

後ろの連中が追ってこなくなったってのも」

「うん。めんどいから私が焼いといた」

上条は夜空を見上げた。

(……ああ、不幸だ)

彼の苦勞は全て無駄になった瞬間だった。

同時刻

上条と美琴が原作通りの会話をしている頃、4つの影が学園都市郊外にあった。

1人は神父の修道服を着た赤毛の男。

1人はTシャツに片脚だけ大胆に切ったジーンズという格好の女性。

その2人に守られる様に立っている銀髪で、シスターの修道服を着た少女。

その3人と敵対する様に、白髪で褐色の肌。

黒い軽鎧の上に紅い外装を纏った男が立っていた。

女性は自身の得物である長刀を、紅い男はいつの間にか現れた白と黒の双剣を手に走る。

「はあああああああ！！」

2つの影が交差する度に鋭い金属音が鳴り響く。

「ステイル！

その子を連れて……早く！！」

「……分かった。任せるよ」

ステイルと呼ばれた男はシスター服を着た少女の手を引きその場から離れようと走る。

「逃がさん！」

「させません！！！」

男が剣を投擲しようとした瞬間、女性はその剣を長刀で弾く。

男はそれに舌打ちをしながら女性から距離を離す。

「流石は聖人。簡単にはやらせてはくれないか」

「……………彼女を殺させはしません」

女性……………神裂は震えを隠しながら長刀を構える。

目の前の男は生きた伝説だ。

6年前に体験した魔術師たちの儀式……………聖杯戦争。

その内、召喚された7騎の英霊の内1人……………アーチャーのサーヴ
アントだった男が目の前にいる。

「10万3000冊……………」

男は呟くように言葉を発する。

その声もまた、アーチャーのものに似ていた。

「キミも分かる筈だ。

彼女は存在するだけで危険な存在だ」

「あの子は……………それを悪用などしません」

「だろうな……だが……いや、やめよう」

アーチャーのような男は両手に持つ剣を放り捨て、新たに一振りの長刀が現れる。

「なっ！？ その刀は……」

「さて……彼の剣豪の技を何処まで再現出来るか分からぬが……。なに、心配するな。

無駄な殺生は苦手だね……命までは取らぬさ」

何故、彼がアサシンの刀を持っているのか神裂には理解出来なかった。

いや、そもそも神裂には目の前のアーチャーがどのような存在かすら分からない。

ただ一つ分かる事は……。

彼があの人「衛宮 士郎」が亡くなった事件を解決したという事のみ。

「秘剣……」

「はあああああああああああああああ……！！」

神裂は走る。

目の前の男を打倒する為に。

「燕返し!!」

男が2つの剣閃を作り出す。

一太刀目は神裂の振るった長刀と打ち合い火花を散らす。

しかし、二太刀目は神裂の腹にめり込み、吹き飛ばした。

「さて……まだやるかね？」

「聖人がこの程度のダメージで倒れるとでも？」

アーチャーは皮肉めいた笑みを浮かべながら再び双剣を構える。

「思っただけだ。」

私のような非才の身では慢心など出来ないのだな」

再び両者は剣を握り直す。

……夜は始まったばかりだ。

新たな物語のプロローグ？（前書き）

偽道です。

完成度が低すぎです。

読んで後悔しても責任持てません。

免許の為の勉強が辛いです。

新たな物語のプロローグ？

何故こんな事に…

ステイルは何度もそう考えながら走っていた。

本来なら、今回も自分達は隣で走っている少女の敵として現れ、憎まれて終わる筈だった。

なのに…

「ステイル、ステイル！」

火織を残してきて大丈夫だったの！？」

「……………彼女なら大丈夫だ」

そう言いながらも、ステイルは不安を感じていた。

神裂が戦いで敗北するなどステイルには想像出来ない。

何せ、神裂は神に近い強靱な肉体を持つ聖人だ。

いくら、“魔術師殺し”と呼ばれるあの男が相手でも敗北はあり得ない。

しかし……………なら…

(僕は何でこんなにも必死に逃げている?)

スタイルの中には矛盾した2つの考えが浮かんでいた。

あの男は神裂には勝てない。

あの男の噂を聞く限り、本来の彼の戦闘スタイルは不意討ちに狙撃。

神裂と打ち合っていた事から剣の心得もありそうだが……あれは、
敗けないだけで、勝てないだろう。

ならば、神裂があの場合に残り、自分達が逃げ延びた今となっては最
早、不安を感じる必要はない筈だ。

しかし、何故かスタイルは未だに死の恐怖を拭えない。

逃げられない……

あの鷹のような眼から逃れられないと感じていた。

だったら、せめて少しでも生存率を上げる為に人混みに紛れようと
判断した。

とは言え、この周辺である都市は学園都市くらいで、学園都市に逃
げ込むにもIDがなくては入れない。

だからと言って、人気のない場所に出ればあの男はすぐに追いつい
て来る気がする。

ステイル達には、既にチエックメイトかけられていた。

だが、ここに来て幸運の女神はステイル達に微笑んだ。

突然、学園都市の内部から雷の柱が輝き、学園都市のゲートは停電。

灯りもない為、警備の人間に気付かれる事も無さそうだ。

要は、不幸な主人公は知らず知らずの内にこの2人を救ったのだ。

アーチャーと神裂の戦いはステイルの考えの様に、アーチャーの敗北で終えた。

「ここまでです。」

いくら貴方が強くても聖人「私」には勝てない」

「確かに。いくら世界と契約しようとも、元が非才の身である私ではキミには敵わないか……」

しかし とアーチャーは言葉を続ける。

「キミは私をなんと呼ばれているか理解しているのかね？」

アーチャーの鋭い蹴りを神裂は後ろに跳び引いて避ける。

その時、アーチャーの手には弓が握られていた。

アーチャーはすぐさま、矢を放つ。

矢は風を切る音と共に虚空へと消え去る。

「……万策は尽きましたか？
貴方の矢は私には中らなかつた」

「確かに、キミには中ててはいない。
私の狙いはそもそも彼女のみなのでね」

神裂はその言葉と共に少女の姿が頭に浮かんだ。

「まさか……あり得ません。
ステイルと彼女のスピードから考えても、少なくとも1km以上は
離れているはず……」

「たかが1kmだろう？」

それだけ言い、アーチャーは自分と神裂の間に小さなナイフを放り
投げる。

「壊れた幻想「ブロークン・ファンタシズム」」

アーチャーがそう呟いた瞬間、ナイフは爆発した。

神裂が爆炎を振り払いアーチャーがいた場所に刀を振るうが、その
時にはアーチャーの姿はなかつた。

神裂から逃亡に成功したアーチャーはステイルとインデックスが逃げ込んだ学園都市に向かっていた。

矢は確かに少女に中った。

何を思ってたか、屋根の上を移動していた少女に矢は中ったのだ。

その瞬間、少女が屋根から崩れ落ちた事も、それを助けようとした神父も落ちたのを見た。

しかし、それで死んだと判断するのは軽率な事だ。

アーチャーが剣を持つ時は必殺を誓う時。

アーチャーにとっての必殺とは、何か良く分からない威力の高い魔法や技を放つ事ではなく、今、自分の持ちこたえる手札で目標を“必ず殺せる”時だ。

アーチャーに慢心などない。

インデックスが確実に死んだと確定する迄、彼の追跡は終わらない。

夜は明けて行く。

正史とは違う物語の幕は開こうとしている。

世界の修正力か、はたまたは主人公の不幸が招き寄せるのか？

シスターは神父と共に主人公の元に辿り着く……。

主人公と元主人公？（前書き）

偽道です。

スタイルの口調ってこんなんでいいのかな？

とか考えながら書きました。

若干、自分の解釈も入っている所もあります。

では、どうぞ…。

主人公と元主人公？

七月二十日 夏休み初日

上条 当麻の脳味噌は目の前の光景に着いてきていなかった。

手に持った布団を下ろし、目を擦った後、もう一度ベランダの手すりに目を向ける。

そこには二枚の布団が干されていた。

しかし、上条の住む学生寮はワンルームマンションに等しい。

つまり、布団が二枚も干されている筈がない。

干してあるのは白い服を着た女の子と黒い服を着た男だ。

「……………よし、これは夢だな」

上条はこれを夢だと決めつける事にした。

（ああ、きつと夢だ。電化製品の八割が壊れているのも、冷蔵庫の中身が全滅しているのも、キャッシュカードを踏み砕いたのも、学校の補習があるのも……………あれ、現実？）

上条にとって、不幸とは自身の日常の一部な為、不幸の数々を挙げしていく内に目の前の光景は夢ではない事を再確認させた。

取り敢えず、上条は女の子と男の救出に乗り出す。

だって、このままじゃいつか手すりから落ちそうだし。

上条が勇気と共に女の子をベランダの内側に引き込もうとした時、男の意識が戻り、視線がぶつかる。

男は何事もなかったかの様にベランダに入り込み、懐をあさり始め、目的の物が見つからなかったのかしかめっ面を見せた後に言った。

「キミ、煙草を持ってないかい？」

「いや、その前に言う事あるだろ」

こうして、上条は今日もまた1日不幸な予感を感じながらため息をついた。

黒一色で統一した服を着たアーチャーは、1人学園都市を歩いていた。

アーチャーの目的はただ1つ。

禁書目録「インデックス」の抹殺「破壊」。

確かに、あの少女に罪が無い事くらいアーチャーも承知している。

しかし、アーチャーは知っている。

いくら、少女に罪が無くとも、その少女の知識を利用しようとする者が必ずいる事を。

3年前のあの事件も似たようなものだった。

未熟だった自分が全てを救おうと……助けようとして守った妹分。

自分の魔術の師である少女の言葉を無視し、現実を直視しなかったあの時。

その結果もたらされた悲劇……。

(私は……俺はもう、あのような過ちだけは犯さない！
あの日……自分を未熟だった己を……衛宮 士郎を殺し、アーチャーに為ったのだから)

アーチャー……衛宮 士郎は歩み続ける。

紅い荒野の果てには何も無い事を知りながらも……。

上条とステイルは気まずい空気の中にいた。

両者共通している事はただ1つ。

身体中に噛まれたような後がある事だ。

「……………」

2人に危害を加えたであろう少女……インデックスはチクチクと修道服を安全ピンで復元しようとしていた。

「……………あの、姫？」

僭越ながらこちらにワイシャツとズボンのセットがあるのですが」

上条の言葉に鋭い視線が向けられる……………2つ。

「……………あの、姫？」

「…なに？」

「今のは100%俺が悪かったでせう？」

上条の言葉に目覚まし時計と炎が跳んでくる。

上条は目覚まし時計は敢えて食らいつつ、右手で炎を消していく。

「ばっ、ステイル止める！」

「ふん、魔女狩りの王「イノケンテイウス」を出さないだけ有難いと思ってくれないかい？」

ステイルも結構ご立腹の様だ。

その後ろでは、やはりインデックスが黙々と修道服の修復作業に勤

しんでいた。

「そつそれで、まだ魔術「オカルト」なんざ信じらんねーけど、お前達はこれからどうすんだよ？」

取り敢えず、上条は別の話題に逃げる事にした。

チヨイスがあまりにもシリアスだが…。

その話題になった瞬間、ステイルの表情から感情が抜け落ちる。

「出ていくよ。ここに身を寄せていても、あの男から逃れられると思わないからね」

「なあ、あんた達がそんなに怖がってる男って何者なんだ？」

「正義の味方だよ」

上条はインデックスの言葉を理解出来なかった。

正義の味方

正義の味方と言えば、助けを求めれば、どんなピンチでも救ってくれるアニメや映画の中にしかない存在であり、けして、たった1人の少女を殺す為に躍起になる存在ではない。

「確かに、あの男は正義の味方だろうね。

僕の知る限りでは、5つの戦争を止め、あらゆる事件に介入しては

何万と言う人を救い、世界滅亡の危機すら一度単独で止めた事すらある。

だと言うのに、それらの功績に対しての見返りなど求めない。」

上条の頭は更に混乱する。

話を聞けば聞くほど、その男は物語に出てくる英雄「ヒーロー」の様にしか聞こえない。

「何でそんな立派な方が、か弱い少女を狙うのでせう?。」

「私が争いの火種になる可能性があるからだよ。」

上条はやはり理解出来なかった。

なぜ、目の前の少女が争いの火種になるのか?

「キミが魔術を認められないのは分かったけど、それでも魔術はあるんだよ。」

そして、魔術師にとって10万3000冊の魔導書さえあれば……殆どなんでも出来る。」

「つまり、この子は存在するだけで魔術師達の殺し合いが発展しかねない。」

少し主旨が違うけど、6年前までは、実際ある物を巡って魔術師達の戦争があったみたいだしね。」

それでも上条は理解出来ない。

「だったら、そいつがその子を守ればいいだろ?。」

その言葉にステイルは呆れたという態度をしながら口を開く。

「それじゃあ根本的な解決にはならないだろう。」

もし、不意を突かれてこの子が敵の手に渡つたら？

もし、その敵が多くの人に害を為す存在なら？

つまり、彼の考えはこうだ」

その様な危険な存在なら消してしまえばいい

上条の体は凍つた様に動かなくなる。

……しかし、同時に上条の心には怒りという炎が燃え上がっていた。

「……なんだよ……それ。」

命をなんだと思ってるんだよ……」

「さあね。僕だって彼が何を考えているか分からないし、分かりたくもない」

それに とステイルは言葉を繋げる。

「あの男は、より多くの人を救う為なら少数を平気で切り捨てる男だ。」

だから、僕達はここから出て行く」

「だっただけど！」

「……じゃあ。私達と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

インデックスの言葉に上条は全ての言葉を失う。

確かに怒りを感じただろう。

確かに自身は他人よりハードで不幸な人生を歩んでいるだろう。

しかし、それでも上条 当麻は一般人に分類されるただの高校生なのだ。

人一倍強い正義感があるうと、多少特殊な力があるうと、上条 当麻はごく普通の高校生なのだ。

そんな上条がインデックスの言葉に即答出来る筈もない。

スタイルとて、上条が表の人間だと理解しているし、寧ろ得体の知れない自分達を匿おうとしてくれた上条には感謝していた。

だから、上条が即答出来ない事を責めるつもりはない。

「大丈夫だよ、私は1人じゃないもの。」

スタイルは強いし、もう1人仲間がいるんだけど、その人に会えれ

「ば安全なんだよ」

ニッコリ笑顔を浮かべながらインデックスは上条に優しい言葉で言う。

「こっちに来るな。」

「ステイル、行こう」

「ああ、世話になったよ上条 当麻」

玄関を出て行こうとする魔術師「オカルト」コンビの姿に言葉を探す。

上条は一瞬だけ自身の力「右手」を見る。

「おい！……なんか困った事があったら、また来て良いからな」

それしか言えなかった。

いや、それだけ言える上条を責める者などいないだろう。

「うん。おなかへったら、またくる」

「僕もその時はお邪魔させて貰っよ」

その後、2人が去った後、上条は補習があつた事を思い出し全力で走る事になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806r/>

とある魔術の固有結界

2011年4月14日23時37分発行